

「語彙ブック」

言葉は使ってこそ身につく！
「語彙ブック」指導アイデア集

1年
P.267-274

2年
P.267-274

3年
P.247-254

関連 学習指導書1下・P339／2下・P360／3下・P301

この指導アイデア集について

- 生徒の語彙を広げ、深めることを目指して、「語彙ブック」を活用した指導アイデアを示す。
- 取り上げる語彙の種類によって、活動の内容は変わるだろう。そこで、ここでは「指導案」という形ではなく、「指導アイデア集」として、六つのアイデアを示した。あくまで「指導アイデア集」という位置づけであるので、授業や時間配分、生徒の実態に応じて適切にアレンジしていただくとういだろう。
- いずれも、隙間時間などで「短時間で手軽にできる」をコンセプトとした指導アイデアである。
- 新たな語彙を獲得し、使用語彙としていくためには「使ってみる」ことが重要である。よって、ここでは、文章の中で言葉を使ったり、類義語を比較したりと、生徒が「語彙ブック」を通して出会った言葉を、実際に「使ってみる」ことができるような活動を示した。これらの活動を通して、日常生活の中で使いこなせる語彙の拡充を目指したい。

「語彙ブック」を使った語彙指導

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編」の〔知識及び技能〕(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項では、語彙について、「語感を磨き語彙を豊かにする」、また、「語句を話や文章の中で使うことを通して、社会生活の中で使いこなせる語句を増やし、確実に習得していくことが重要である。」と述べられている。つまり、語彙指導で重要なのは、(日常生活の中で) 言葉を「使える」ようにすることである。

「語彙ブック」を使った語彙指導として、例えば、1年「心情・行為を表す言葉」(P270)を参照しながら、自分が体験したことを基に随筆を書いたり、3年「批評するときの言葉」(P252)を参照しながら、批評文を書いたりする活動が挙げられる。また、「読むこと」の学習においても、2年「人物を表す言葉」(P270)や、3年「心の動きを表す言葉」(P248)を用いた活動が考えられる。

いっぽうで、生徒の使用語彙を増やすためには、教材と教材の間に挟むような形で、短時間の語彙指導をたびたび行うのも有効な方法だと思われる。ここでは、そのような短時間で手軽に、生徒が楽しみながら使用語彙を増やしていけるような指導アイデアを紹介する。

指導アイデア		「語ブ」は、学習活動の中で参照させたい「語彙ブック」のページ	
	学習活動	指導上の留意点など	
1	情景を表す言葉で始まる随筆を書こう！ 「語ブ」1年「情景を表す言葉」(P268) ● 情景を表す言葉を一つ選び、「その日は○○だった」で始まる200字程度のミニ随筆を書く。 ➡随筆でなくてもよい。物語を書くなどの活動も考えられる。	● 字数は、書かせたい内容や生徒の実態に合わせて設定する。 ● 今まで知らなかったけど、使ってみたいと思う言葉を選ばせるとよい。 ● 有ること無いこと、自由楽しく書かせることがポイント。 〈例〉 その日は、 <u>抜けるような青空</u> だった。雲一つない青い空。あふれんばかりに注がれる爽やかな日差し。天気がよいだけで気分が上がる。なんにも予定がなかったが、「絶好のピクニック日和だ！」と思い立ち、お弁当を作って公園に行く。何も考えずに草むらに寝転び、コバルトブルーの空を眺める。空を見ると、それだけで「大丈夫だよ。」と言ってくれる気がするから不思議だ。天気の良い日にはこうして空を仰ぐのが一番だ。(198字)	
2	写真の情景にぴったりくる言葉を選ぼう！ 「語ブ」1年「情景を表す言葉」(P268) ● 晴れの日、曇りの日、雨の日など、さまざまな情景の写真(スライド)を見せる。 ● 写真の情景に、いちばんぴったり合う言葉は何かを考えさせる。 ➡「語ブ」2年「感覚で捉えた言葉」(P268)から、写真の情景にぴったりくる言葉を選ばせる活動も考えられる。	〈例〉「雨の日の水たまりに波紋が広がる様子」の写真を見せる。 →「情景を表す言葉」から選ぶなら ・ばらばら ・ぼつぼつ ・しとしと ・小雨 ・ ^{しゅうしゅう} 蕭々 など →「感覚で捉えた言葉」から選ぶなら ・肌寒い ・しっとり など 〈例〉「厚い雲に覆われて真っ暗になった空」の写真を見せる。 →「情景を表す言葉」から選ぶなら ・曇天 ・黒雲 ・暗雲 ・今にも泣きだしそうな空 など →「感覚で捉えた言葉」から選ぶなら ・漆黒 ・陰影 など	

	学習活動	指導上の留意点など
3	五感を使って書こう！ 語ブ 2年「感覚で捉えた言葉」(P268) ・「語彙ブック」で紹介されている、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚に関する言葉を、それぞれ1語以上使って文章を書く。 →音や匂いなどの感覚に絞って、「食レボ」を書くという活動も考えられる。	・五感全てでなくてもよい。生徒の実態に応じて、使用する言葉の数を設定する。 〈例〉 薄明かりが部屋の窓から差し込んでくる朝だ。楽しそうな鳥たちの声が静寂を破る。よい天気だ。台所からは香ばしいパンの匂いが漂ってくる。<u>ふわふわ</u>としたパンにバターを塗り、口に運ぶ。口いっぱいに北海道産バターの<u>うまみ</u>が広がる。 ・以下の例のように、「語彙ブック」を出発点としてさらに言葉を広げさせてもよい。 〈例〉好きな食べ物の「食レボ」 僕のいちばん好きな食べ物は、〇〇亭のハンバーグだ。鉄板の上でじゅうじゅうと音を立てながら焼けるハンバーグから、ソースの<u>香りが立ち上る</u>。それだけで食欲をそそられる。<u>熱々</u>のハンバーグにナイフを入れると、少し<u>ごつごつ</u>とした感触がある。普通のひき肉ではなく、超粗びきのひき肉を使っているのだ。一口食べただけで口いっぱいに牛肉ならではの<u>うまみ</u>が広がる、最高のハンバーグだ。
4	グラデーションで並べよう！ 語ブ 3年「心の動きを表す言葉」(P248) ・心情を表す言葉について、軸を設けて、その程度や度合いを整理し、言葉を並べさせる。 → 語ブ 1年「心情を表す言葉」(P270) 語ブ 2年「人物を表す言葉」(P270) など、他のページを活用することも可能。	〈例〉3年「喜ぶ・楽しむ・笑う」(P248) に分類されている言葉を、喜びの度合いが大きい順に並べる。 小さい 喜び 大きい ← 嬉 ほ わ 心 楽 口 愉 満 大 浮 歓 破 熱 天 狂 喜 笑 む く 躍 観 元 快 足 笑 き 喜 顔 狂 に も 昇 乱 舞 む く る が が ほ ご い 立 興 心 地 ぶ ・1年「情景を表す言葉」(P268) のグラデーションを参考にさせるとよい。 ・個人ではなく、グループで考えさせてもよい。 ・グループごとに、「喜びグループ」「感動グループ」「ためらいグループ」「怒りグループ」など、担当する心情を決めて取り組ませてもよい。 ・生徒の実態に応じて、教師があらかじめ、並べさせる言葉を絞っておいてもよい。

	学習活動	指導上の留意点など
5	〇〇と△△ってどう違う？ 言葉を比べよう！ 語ブ どのページでも可 ・教師があらかじめ、「語彙ブック」の中から、似た意味の言葉を二つ選んでおき、生徒に提示する。 ・二つの言葉について、共通点と相違点を明らかにするとともに、それぞれの言葉を使った例文を考える。 ・二つの言葉の違いと、考えた例文を、グループの中で発表し合う。	・二つの言葉の違いについては、あらかじめ教師がよく確認したうえで生徒に活動させるとよい。 ・言葉を比較する際には、意味の違いだけでなく、言葉の使い方や使う場面の違いにも着目させるとよい。 ・二つの言葉の使い方の違いが明確に伝わる例文を考えさせたい。 〈例〉2年「抽象的な概念を表す言葉」(P272) から「慢心」と「うぬぼれ」を選んで、比べる。 ・「慢心」…自分の才能や実力を過信して、思い上がること。 ・「うぬぼれ」…実際以上に自分が優れていると思込み、得意になること。 →共通点…実力以上に自分が優れていると思込で、いい気になるという意味。 →相違点…「慢心」は実力がある人に使うのに対して、「うぬぼれ」はそもそも実力がない人にも使える。 →例文…成績が上がって<u>慢心</u>し、勉強を怠けるようになった。／まだ未熟なのにもかかわらず、少し褒められただけで<u>うぬぼれ</u>ている。
6	例文スタジアム たくさんの例文を作ろう！ 語ブ どのページでも可 ・教師があらかじめ、「語彙ブック」に掲載されている言葉を使用し、グループの数に合わせて、カードを作成しておく。 〈例〉6グループある場合、1年「心情を表す言葉」(P270) から、「歓喜」「はしゃぐ」「有頂天」「声が弾む」「心が弾む」「会心の笑み」など、6枚のカードを作成する。 ・グループごとにカードを1枚ずつ引き、その言葉を使った例文を、思いつくだけたくさん作る。 ・より多くの例文を作ることができたグループを勝利とする（判定は教師が行う）。	・ゲーム感覚で取り組ませたい。 ・カードではなく、教師が言葉を指定して、全てのグループで同じ言葉を使って例文を作らせてもよい。 ・最もセンスのよい例文を作ったグループを勝利としてもよい（この場合は、生徒全員の投票によって決める）。 ・言葉は使ってこそ、身につくものである。例文の作成を通して、日常生活の中で使える言葉を増やしていきたい。 〈例〉「歓喜」のカードを引いたグループの例文 ・合格の知らせを聞いて、彼は<u>歓喜</u>の声を上げた。 ・優勝の瞬間、観客は<u>歓喜</u>に包まれた。 ・彼女は<u>歓喜</u>の涙を流しながら家族に報告した。 ・ついに夢がかない、<u>歓喜</u>の瞬間が訪れた。 ・新製品の開発に成功し、自然と<u>歓喜</u>の拍手が沸き起こった。 など